

小児の異物誤飲事故に関する意識調査についての検討 (分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

研究協力者 日本大学医学部小児科

大久保 修

共同研究者 板橋区医師会病院小児科¹、日本大学医学部小児科²、
沼津市立病院小児科³、板橋区板橋健康福祉センター⁴、
板橋区立高島平健康福祉センター⁵

泉 裕之¹、宮坂 周²、宇佐美 等³、小林万里⁴、
成田友代⁴、丸貴ミサ⁵、内藤娜々子⁵

【要約】 異物誤飲は、小児の事故の中で高い頻度を占めている。生後5か月より発生し、乳幼児での頻度が高い。今回、我々は小児の異物誤飲に関する保護者の意識および誤飲事故の有無についてアンケートにより調査した。

対象となったのは949例で、男児484例、女児465例であった。誤飲の経験は15.9%にみられた。誤飲経験群は、非誤飲群に比べ、「不要な薬をすぐに捨てる」、「殺虫剤、医薬品などを子どもの手の届かないところに保存している」で、はいという回答率が有意に低かった。また、母親の喫煙率が有意に高かった。同胞に異物誤飲の経験がある群では誤飲頻度が35.0%と高く、同胞に誤飲経験がない群での誤飲頻度9.7%と比較すると有意差を認めた。

今回の調査より、保護者の多くが、異物誤飲に注意していることが示されたが、誤飲事故は15.9%と高い。また、同胞が誤飲経験のある群での誤飲頻度は高く、異物誤飲にタバコが占める割合が大きかった。このような点から、誤飲事故を減少させるための安全教育の必要性を再認識した。なお、今回3～4か月で安全教育を施行した群では、その効果が認められなかった。指導方法および指導時期が適切であったかを再考する必要がある。

【見出し誤】 小児の事故、異物誤飲、事故防止、安全教育

【はじめに】 異物誤飲は、小児の事故の中で高い頻度を占めている。生後5か月過ぎ頃より発生し、幼児では特に頻度が高く、日本における頻度は欧米諸国の3～4倍である。今後、異物誤飲事故を減少させるために、啓発活動が必要であると考えられるが、その方法を検討するために、意識調査を施行した。

【対象】 平成9年1月～12月に、板橋区医師会

病院、日本大学板橋病院、板橋区健康福祉センター、高島平健康福祉センターで1歳6か月時健康診査のために訪れた小児、更に沼津市立病院、宮坂医院（上田市）を受診した同年齢の小児を対象とした。

【方法】 病院を受診したものについては、診察前の待ち時間にアンケート用紙の記載を保護者（結果的に母親）に依頼した。保健所においては事前にア

表1 調査に使用したアンケート用紙

あなたの家庭をお子さんにとって安全な場所にするために、次の質問の当てはまる項目に○印をつけて下さい。

お子さんの生年月日・性別は 【 年 月 日 】・【男・女】
 きょうだいはいますか。 【いない・おこさんは（ ）人きょうだいの（ ）番目】
 あなたの年齢は 【 】歳
 他にお子さんの世話をしている人は 【いない・祖母・祖父・その他（ ）】

1. 子どもは直径32mmより小さな物体は、あやまってのみこむことがあります。
 あなたのお子さんは、小さなもの（ビーズ、硬貨、おもちゃなど）であそぶことがありますか？
 【はい・いいえ】

2. 床から高さ1m以内は乳幼児の手が届く要注意範囲です。
 タバコ、薬、針、ビーズ、硬貨などを置かないようにしていますか？ 【はい・いいえ】

3. 不用になった薬や殺虫剤などは手の届かない場所に保管するか、すぐに捨てるのが安全です。
 不用な薬などをすぐに捨てていますか？ 【はい・いいえ】

4. ピーナッツなどの小さな豆類、アメなどは気管に入りやすく、特に3歳までは危険です。
 小さなお子さんには与えないようにしていますか？ 【はい・いいえ】

5. 殺虫剤、医薬品、灯油、トイレ用洗剤、漂白剤などは飲み込んだ場合、特に危険です。
 お子さんの手が届かないように保存していますか？ 【はい・いいえ】

6. 地震の時には、本棚、家具、壁に掛けてある額などが危険です。
 地震の時の対策はしてありますか？ 【はい・いいえ】

7. 家族の中でタバコを吸う人はいますか？ 【はい（父・母・祖父・祖母・その他）・いいえ】

8. お子さんは、誤飲の経験がありますか？
 誤飲事故の経験 【いいえ・はい（ ）回】
 飲んだものをすべて書いて下さい。 歳 ヶ月 歳 ヶ月 歳 ヶ月
 （ ）（ ）（ ）
 その時主にどうしましたか？ 【医療機関を受診・自分で吐かせた・様子を見た】

9. きょうだいのうち誰かに、誤飲の経験がありますか？
 兄弟の誤飲事故の経験 【いいえ・はい（ ）回】
 飲んだものをすべて書いて下さい。 歳 ヶ月 歳 ヶ月 歳 ヶ月
 （ ）（ ）（ ）
 その時主にどうしましたか？ 【医療機関を受診・自分で吐かせた・様子を見た】

表2 アンケートの結果
(誤飲群と非誤飲群)

	全体 (N=949)	誤飲 (+) (N=151)	誤飲 (-) (N=798)
年齢	1.53±0.06	1.53±0.05	1.53±0.06
男女比	1.05	0.89	1.07
保護者(母親)の年齢	30.9±4.6	30.0±5.0	31.1±4.5
同胞あり	47.4%	41.7%	48.0%
問1(はい)	68.6%	72.8%	68.0%
問2(はい)	95.3%	94.0%	95.6%
問3(はい)	89.7%	82.1%	91.5%
		└p<0.01┘	
問4(はい)	82.0%	78.1%	82.7%
問5(はい)	89.2%	85.4%	93.3%
		└p<0.05┘	
問6(はい)	34.7%	31.3%	35.6%
問7(はい)	65.7%	74.7%	63.9%
母親	17.7%	26.0%	16.1%
		└p<0.01┘	
問8(はい)	15.9%		
問9(はい)	16.1%	44.3%	13.7%
		└p<0.01┘	

表3 アンケートの結果
(安全教育の有無)

	全体 (N=949)	A群 (N=539)	B群 (N=410)
年齢	1.53±0.06	1.53±0.06	1.52±0.07
男女比	1.05	1.04	1.05
保護者(母親)の年齢	30.9±4.6	30.6±6.4	30.4±4.7
問1(はい)	68.6%	72.5%	63.9%
		└p<0.01┘	
問2(はい)	95.3%	94.8%	95.9%
問3(はい)	89.7%	87.8%	92.2%
問4(はい)	82.0%	80.0%	84.7%
問5(はい)	89.2%	86.5%	93.0%
		└p<0.01┘	
問6(はい)	34.7%	30.6%	40.0%
		└p<0.01┘	
問7(はい)	65.7%	64.2%	67.6%
問8(はい)	15.9%	17.3%	14.1%
問9(はい)	16.1%	19.0%	16.5%
		└p<0.01┘	

A群：3～4か月時に誤飲予防の安全教育をした群

B群：それ以外の群

アンケート用紙を郵送し、来所時に回収した。アンケートの内容は、対象となった小児の年齢、性別、保護者の年齢の他、表1に示すように、異物誤飲に関連する意識、および実際に誤飲をしたか、同胞が誤飲をしたことがあるかについて尋ねた。

また、3～4か月時に、乳児健康診査の際に、実際に小さなものなどを見せて、異物誤飲事故に関する安全教育を行った群と、それ以外での比較検討をした。

質問は、問1で、「子どもは直径32mmより小さな物体は、あやまってのみこむことがあります。あなたのお子さんは、小さなもの（ビーズ、硬貨、おもちゃなど）で遊ぶことがありますか？」のように、質問自体が啓発をかねる形式にした。

【結果】 対象となったのは949例で、男児484例、女児465例であった。年齢は1.53±0.06歳であった(表2)。問1のこどもが小さなもので遊ぶことがあるかという設問に対しては68.8%が、あ

ると答えた。誤飲経験のある群では72.8%、ない群では68.0%で有意差を認めなかった。問2の床から1m以内にタバコ、薬などを置かないようにしているかでは95.4%が、はいと答えた。誤飲経験の有無で有意差を認めなかった。問3の不要な薬などをすぐに捨てるのは90.0%であった。誤飲経験のある群では82.1%で、誤飲経験のない群が91.5%で、有意差を認めた(p<0.01)。問4のピーナッツなどを与えないようにしているかは81.9%であり、両群での有意差を認めなかった。問5の殺虫剤、医薬品などを子どもの手の届かないところに保管しているかは90.1%であった。誤飲経験のある群では85.4%で、誤飲経験のない群より、低い傾向(p<0.05)にあった。地震の対策については、34.6%がしていると答えた。家族の喫煙率は65.6%であった。誤飲経験のある群では74.7%で、誤飲経験のない群の63.9%より喫煙率が高いようであるが、統計学的有意差はなかった。しかし、母親の喫煙について検討すると、誤飲群での喫

煙率が26.0%であり、非誤飲群の16.1%より有意に高かった ($p<0.01$)。誤飲事故の経験があるものは15.9%で、その内容は、タバコが44.6%ともっとも多く、次いで固形異物が40.0%であった。同胞がいる群では、同胞に誤飲事故が44.3%みられた。これに対して、誤飲経験のない群では、13.7%であり有意差を認めた ($p<0.01$)。

3～4か月で安全教育を施行した群と、それ以外の群で、比較した(表3)。問1の子どもが小さなもので遊ぶかについては、安全教育群の方が、72.5%と高率であった。また、問5、問6で有意差が認められた。異物誤飲事故の頻度は、むしろ安全教育群の方が高かったが、有意差はなかった。

【考案】 小児の死亡率の第1位は不慮の事故であり、その対策が重要である^{1),2)}。異物誤飲は、小児において頻度の高い事故である。乳幼児期は、手にしたものをなんでも口に持っていく時期である。従って、保護者がそれを誤飲しないように気をつける必要がある。今回の調査で、最初の質問の、こどもが硬貨など小さなもので遊ぶかでは67.7%が遊ぶと答える。こどもが小さなもので遊ぶことは、精神運動発達のためにも必要なことであり、十分な注意のもとではむしろ勧められることである。その他の設問で、異物を小児の手の届かないようにするかに対しては、約90%が気をつけていると答えており、小児が異物を誤飲しないように、保護者の多くが、異物誤飲に注意していることが示された。しかし、誤飲事故の頻度は高く、15.9%であった。特に、不要な薬をすぐに捨てる、殺虫剤、医薬品などを子どもの手の届かないところに保存するで、誤飲群と非誤飲群に差が認められ、危険物を子どもの手が届かない様にすることが重要であると再認識した。特に、タバコの誤飲は全体の44.6%と高い頻度である。アメリカでは1%以下であり³⁾、タバコ誤飲は日本の特徴である。この原因としては、靴を脱ぐ習慣、畳の上での生活が関係していると考えられている⁴⁾。また、家族の喫煙、特に母親の喫煙との関連が深く、安全教育の際に、タバコの保管や灰の始末について、強調する必要があると考えた。十分に注意すれば、事故を減少させることができると思われる。また、誤飲経験のある群では、同胞の誤飲頻度が有意に高く認められた。誤飲事故を経験した家庭では、次のこどもでも誤飲事故を繰り返すこ

とが多いことが示された。このように誤飲を繰り返す家庭の生活習慣の特徴があるのか、今後検討する必要があると思う。

次に、3～4ヶ月検診で、誤飲事故についての安全教育を施行した群では、むしろ誤飲率が高く、効果があったとはいえなかった。安全教育群とそれ以外では、問い5、6に差がみられた。これは、地域的な差がみられるのかもしれないが、明らかではない。

今後、これらの結果を踏まえて、安全教育の方法、時期についてさらに検討する必要があると思う。

【文献】

- 1) 田中哲朗：子どもの事故の現場と対策の必要性、小児科臨床49：915-925、1996
- 2) 大久保修：小児の交通事故とその予防、小児科臨床59：1611-1616、1996
- 3) Litovitz TL, et al : Comparison of pediatric poisoning hazard : An analysis of 3.8 million exposure incidents. Pediatrics 89:999-1006, 1992
- 4) 木下博子、藤本保：小児の誤飲事故の実体とその予防、小児科臨床59：1588-1593、1996

Abstract

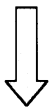
Attitude of Parents against Preventing Accidentally Ingestion of Children.

Osami Okubo, Hiroyuki Izumi, Shuu Miyasaka, Hitoshi Usami,
Mari Kobayashi, Tomoyo Narita, Misa Maruki and Nanako Naito

Accidentally ingestion is a high rate among the accidents with infants and children. There is a risk of accidentally ingestion after five months after birth. Parents should be careful about small materials and poisons. We investigated about attitude of parents against preventing accidentally ingestion of children.

We analyzed 949 cases of one and half year old children. Parents, who avoid drugs soon or keep poisons at the place children cannot touch, have low risk of accidents. Smoking mother is one of the risks. There is a tendency that accidents are repeated in the same family.

Although majority of parents take care about small materials and poisons, accidents occurred in 15.9 percent of children. In conclusion, education about safety of children is important for preventing accidents.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】異物誤飲は、小児の事故の中で高い頻度を占めている。生後5か月より発生し、乳幼児での頻度が高い。今回、我々は小児の異物誤飲に関する保護者の意識および誤飲事故の有無についてアンケートにより調査した。

対象となったのは949例で、男児484例、女児465例であった。誤飲の経験は15.9%にみられた。誤飲経験群は、非誤飲群に比べ、「不要な薬をすぐに捨てる」、「殺虫剤、医薬品などを子どもの手の届かないところに保存している」で、はいという回答率が有意に低かった。また、母親の喫煙率が有意に高かった。同胞に異物誤飲の経験がある群では誤飲頻度が35.0%と高く、同胞に誤飲経験がない群での誤飲頻度9.7%と比較すると有意差を認めた。

今回の調査より、保護者の多くが、異物誤飲に注意していることが示されたが、誤飲事故は15.9%と高い。また、同胞が誤飲経験のある群での誤飲頻度は高く、異物誤飲にタバコが占める割合が大きかった。このような点から、誤飲事故を減少させるための安全教育の必要性を再認識した。なお、今回3~4か月で安全教育を施行した群では、その効果が認められなかった。指導方法および指導時期が適切であったかを再考する必要がある。